生花早満奈飛 六編 全

出世花早學廿六編序

むかし彼どの店れ清女か小説雛に撰乃
もさし出るをとえてなど志てのくりのまゝ
なりし今もあとやんでとれさ流行つゞり
まもなるとしるて出世乃道ぞされ成けの
四ツ業るが満しみいつしる志げるさかえ
様しきどもわ数ぶ売とくハあかりまいり
の新をひ又満ちひさ小冊いや次くに

紛いまてかく編を重ねるともとくは咲
花の匂ふがわき 大御代のよぶりや
いやましもて紛みん心尽し人のうる
はしき功とやいふへし

戊申とし
秋中旬 山田耕誌

生花早満奈飛六編目録

一 卓下生花懸物客位主位差別図式
一 鈎香爐會釈の掛花書院鈎花器并飾備圖式
一 三體九形に分る図解梅椿の挿方菊女郎花数挿の圖
一 馬蘭数挿圖解 一流枝遣方左右勝手之図
一 椿菊會釈つけ方の圖 一馬蘭會釈つけ方之圖
一 馬蘭雑挿の心得 同図式并ニ曲挿之圖
一 梅嫌馬蘭小菊三種雑挿之圖
一 大生物図式 一堅炭遣方 一草木會釈の差別

卓下生花之圖
卓下の花ハ凡て低く入るとおもふべし是卓を恐るゝこゝろ少し下へさがるやうにて心得且又かくらぬやうに挿べし右香爐をおき下ニ花を生るを草也荘りし又左右ニ立花中ニ香炉を荘るを本荘とし卓ニ腰高平卓の二種あり
卓の色ニ似る色の花生べし
掛花
藤袴
雁香爐
一說ニ
東山殿御時代床飾ニ掛物をかけ立花を生てハいかうあまりつきて宜しからずとて卓下の花をはじめるに故ニ卓下の花ハ立花師よりこそはじまるト云

床の正中と軸本より軸前まで同明を受る方を軸先より勝手の方と軸脇より軸先ハ客位より軸脇ハ主位なり
すべて上座客位の方へ枝を流し是客を請じてもてなし

又主より客へ乞て花を望む時ハ客ハ相客へ一礼して主位へ生るゝ
是客より主人への饗應に二幅對をかける時ハ花を軸脇へ寄て生べしと云り

掛物ハ床下にてかざる中より直に掛べし巻緒ハ勝手の方へ引よせ置べし
三幅對の時ハ左右ハ左右へ引中ハ勝手の方へ引べし

草木の名画をかける時ハ
花器に水ばかり入置もあり

○香の會にハ香の高き花ハ生べからず万一亭主より客へのぞミて花を生るとき所望せバたとへバ蘭の花を出しなるとも是ハ香ひ高き花なりとて生ざる時ハ亭主へ對し不興なれバかやうの時ハ花の姿もかまハず開きたるを残らず取捨て蕾ばかりにて花を低く幽かに生るがよし余ハ是に准ずべし

○古歌又ハ文などの掛物をかくる時ハ其文に花の事いれバ其花を生るがよし

○舟の釘ハ古の床の天井の真中に蛭釘を打来りしが後に落しがけの内面に打又外面にも打たりしとぞ後世にハ真中といふて床二ッ割一分の正中へうち或ハ二ッ割より一分の上座の方の真中に打ともいへり

又流義によりてハ床の天井へハ打ず遠棚へうつあり遠棚行ちがひ二ッ有バ上の棚の左右前後の真中へ打なり棚一の時も右の通に打之又棚なしに袋棚ばかり有時ハ袋棚の板に右の通に打なりといへ

書に落しがけより舟の底まで

一尺二寸 ト云

尚船の事ハ奥にくはしく出せり

長繪のかけ物にハ舟の高さがよし横がけ物にハ低くさげるがよし横物に高く釣べからず

一説に此間船の底よりたゝみまで一尺三寸明る也

付書院釣花瓶
鳳凰草
料紙箱
水滴
筆
文鎮
硯
墨
釣香炉
釣香炉ハ床の天井の真中の蛭鐶に釣るなり是ハ古へ釣るよともさげる所あり
床柱のかけ花器ハ落しがけの外へ出ぬやうに生べし

○床の本荘ハ三幅の軸ニて中ニ香炉卓ハ平作を用ゆ平卓ハ高さ凡
二寸也左右立花の對を置く也時ニよつてハ横物を用ゆる時ハ本卓
なり本卓ハ腰高ともいひて高さ凡一尺前後なり

○卓下の花ハ必らず一花一葉も脚の外へ出るべからず凡て低く入べし
卓を恐るゝとて少し下へさがる様ニ心得べく又花天を突き地を突く
事を忌ふなり但し卓下の花ハ香ひあるものを生ず是上の香ニ憚
てなり尚香の席茶席も又同じ香立及食物とも忌むべしとなり

○一説ニ卓下の花生る時ハ香炉を用ゆまじき也是花ハ風火の二ツを
堅く忌むゆゑ也其時宜ニよるべし然れども香炉を置て香を焼ざるも
なし又香臺ニ香炉荘ざる事なし又上ニ花を置ことも古来きらふ思慮

なるべしなり原来卓下の花ハ柱掛又ハ廣物ニ生べきさ花もあるさしき
されど小品なれバ生るより始まり故ニ水仙の一本椿の一輪ホなり然るを
今誤つて卓下の花ハ必らず一花一葉のものと心得るハ非なり

○床ニ本床踏込の差別あり本床とハ寸法の床掾付之踏込とハ上に
床の形ありて下ハ畳の敷延之又洞床塗込床の好あり何も侘る風流之

○一説ニ床ハ皇の御座ニ表せしものニて上の御高恩を忘却せざる為ニ
家毎に此席を備け常ニ清し軸をかけ花を荘て敬ひ奉るなりしらべ

○書院ハ原学文所ニして町家ニハ無用のなり床の傍ニあるを付書院
出書院などいへり又本床袋棚違棚なども下々の物ニハなくて

○座敷ニ上下の差別二品あり常ハ床ニ近れを上座とし佛事の時ハ

佛に近きを上座とし茶席は釜に近きを上座とする歟

○草木ともに枝の切口は平にきるべきとし既に三篇に委しく記せり然るに一説には生花は立花とは異にして小刀一挺を以て仕立るが古来の法なれバ小刀ハづきを斜につくりの故斜に切べし鋸を用るとも斜に挽て小刀にて作るべし趣を守るべしとなり是も又默しがたき説あり松梅などの幹にありては平に挽伐且竹には斜と平との切方を用ゆるといへり流義によりて斜に限て平に限るも有べし是は其師家の教にしたがふべし

○主位客位中央これを三体といふ凡花の表勝手の方へ向ひたるは主位と是主人の見る意といふ故に主意とも書て又花の表上座に向ひたると客位といふ是も客意とも書く次に花の表正面に向ひたるを中央と称ふ

三躰の図

○真

青山流にハ是を陽上といふ

是より出て又三躰あり次に図をいだせん

○行

同おなじく中張といふ

尚これより三躰出る次に志るす

○草

同是を水際ちびきト云

此草より出て又三体あり次に図を出せり

○凡千草萬木其風情異なりといへども花容ハ大概右に図すがごとし先右の枝を高く長く面出れバ左低く短く出し或ハ左曲る離る時ハ右直て添ひ又右靡きて下より出れバ左伸びて上より出し或ハ一木にても三枝を兼一草にても三條を備ふいづれも其形状に志たがひ瓶に臨んで辨別すべし

○出生を心得べき事第一にして草木ともに山林幽谷或ハ野沢の形容を席上に移し取を本意とし花様の順を失ふべからず

○木ハ一瓶を一樹の花様に表し草ハ一瓶を一叢の花様に表す故に木ハ水際より其身木をとゝのへ草ハ一叢の中より高く立のびるを心と見立るべし花様ハ千変万化すべし

○一花一葉の花ハ求めて生べからず いづれ貴人高位より給はりし又ハ珍花杯にして取りいくべし且下様に入るゝハ格別畢竟止を得ざるの沙汰なり

真

青山流にて是を乗越と云

真の二躰の図

前に一躰を出し

此枝ともにうしろへつくる

真

同右を後属より入

此枝もと をくゝびく

行

行の二躰の図

前に一躰を図し

都合三躰あり

同是を表につけると云

行

同是を裏につけると云

草の二躰の図

前二躰を出し合せて三躰なり

青山流にて是を前ぞへといふ

草

同じく是を後ぞへといふ

此ぞへをうしろかびきといふ

草

右真行草の三躰にかぎらず又三體づゝの形をわかつ但し都合九躰となる此余曲花さまざま有といへども皆九躰の本意より出る所にして其方を失はば譬ハ人の手に酒興に乗じ舞をどるがごとし其本心を失ふなれバ道に背くといふ心乱るれバ五常の道にそむく終にハ其身の禍と醸れ花又これに同じ

梅二本の図

右を三本にて調ふ時ハ前によろしき前添のごとし

凡て二本の外ハ丁数をとりもつべし

是ハ小枝一本之

これハ一本にて天人を兼ぬる枝也故に二本にて三体をなすのこと

右の枝二本にて挿す所

梅 三本
此挿方ハ通例人の枝ト挿天の枝より地の枝ヘさされ順く又流義ようて
天よりさしても人地しさればなり
留の一枝ハ奥へうくるゆゑ中すれ挿おと肝要なり さぐて留の一えだを以て一体のさまりをまとめ其役枝ハかさしかるべく重しと思ふべし
一
二
三
菊 九本の図
九本の時ハ右ニ図する七本の上ニ扣のうしろひと胴のまへとけと二本増あり花形ハ是ニかぎらバ増補の次第かくのごとし
真
副
體
胴
扣
流
留
しんのうしろ
扣のうしろ奥の方ニある
胴のうしろニある

十一本の花形

右に図する九本の上に留のたすけ二本増く

真
副
胴のたすけ
胴
留
和のあしらひ
和
流
留のたすけ右へひらく
留の、たすけ前へさしゆる

○流の枝遣ひ方の事

○都て花形ハおびたゞしき遣ひ方ありて種々の形容の作まちまちなれど是によりて先初心の間ハ只天人地の三躰を正しくして一通りを能挿習ふべし上達の上に至てハ時にあたりてふさはしき様によりて種々の形容を生ずるといへども手ぶれなるも巧者となりてくれバ流の遣方を次にいふしき図を出せり凡て一形にかぎらねバ色々の花様に廣く挿るを以て本意とすべし

○立花に九品のさし方あり挿花にも又有べし先真に真行草あり行に真行草あり草に真行草あり真の真とハ右に図しる十七本の挿方に本勝手逆勝手ともに真之十五本ハ真の行十二本ハ真の草之行の真行草ハ十一本の花形を以て行の真とすべし九本ハ行の行七本を

行の草之草の真行草ハ五本ハ草の真三本ハ草の行なりされバ二本を以て
手軽く挿るこそ草の
草と言べしなべて
掛花ハあしらひ等ハ△
○椿二本
二体と調ふ
△草の草なるもの多し
女郎花
十三本の図
右ハ前よりかゝれ
十一本の生かた
流のあしらひと肩の
あしらひと二本増あり
真
副
胴
肩
肩のあしらひ
胴のうけ
和のあしらひ
和
流
留
留のあしらひ
流のあしらひ

十三本の花形と馬蘭十二枚に
直し本勝手と逆勝手に生る図
○本勝手とハ前にてひらける勝手之
是を右勝手とも右座の花とも
本座の花ともいふ
○逆勝手とハ此馬蘭の通の
勝手にて左勝手とも
左座の花とも逆座の
花とも云左右の生
あしハ大かた斯のごとし

右十三枚に二枚を増しれハ胴の
たすけと肩のたすけに二本
そゆる也都合十五枚となる也
是に限るにハあらざれども
大概かくのごとし
なをくハ図をみる
巻葉枯葉の
事ハ第四編に
くはしく出せり

十七本 左勝手
前に當する十五段の生方に
肩のなすけと留のくすけと
二とおろ増さるく
又右勝手の花形ハ
前にまろしるる
留にて考へ
まるべし
車盤なれバ
別にまるるべし

結び南天 南天を結ぶハ
生花者流の秘事也
くハしくハ第二編に出ス

南天と燕子花との事ハ
茶席にハ嫌まして書院にハ撰ひ
たし

左勝手
内流し
二重留
右勝手
留流し
同上
内流し
同上
真流し
十五
斯のごとく心よりはなるゝ時は心を取のくればたちまち横に倒るゝの形容なり
右下の葉正面と見切りて
上の葉正面にさしむけていけべし
此葉正面にかゝりていけべし
正面と見きるとしるべし
右と直しく
左のごとくすれば會釈も力ありて風情もよし
正面さらにふしおぶやうなると
しるべし
右のごとくにまがれば
心とならざるも
一種の花操なりよろしく心とすべし
此なりも心とてあれば
力もあり風情もありて
しかも花と
あづかるのなり
十六

馬蘭五枚のかこひ

連翹に馬蘭五枚のかこひ

大菊馬蘭雜生

天

人

地

ばらんにて人の備とあれ

馬蘭 三枚
馬蘭の葉の盛ハ十一月あたりとす
盛の旬には枯葉と用ひべし
三枚のうけ花
巻葉ハ秋の中旬とす
馬蘭 十一枚
馬蘭三枚
美人草のあしらひ

馬蘭九枚

木物に二枚のあしらひ

馬蘭三枚うけ花

同七枚

葉員多き時は管葉をつくりてゆふ

凡二三月より六月まで余は用ひず

管の巻方第四編にくはしく出す

同七枚

小菊のあしらひ

馬蘭三枚　大菊　雑生
木物ニ馬蘭五枚の
行のくらひ
馬蘭ハ二枚以上
九枚卅枚迄ハ任すべし
行のくらひハ何もかれつく物なれば
図のごとく根をまげて用ゆべし
右ハ二本にて三体を備ふ
又左なくバ
根をまげて
竹とうつわのごとくさすべし
此間をひらくべし
正面に花葉なくてはからぬ
此ごとく正面と見切るときらふ
右と同じ
是又同じ

○四季會釈の差別

○正月梅の會釈ニハ蕗薹乃木の類ひよし筒ハ一重二重ホよし廣口ハ
内真の馬盤ハ用ゆべからず右真の花よし

○三月桃のかしらにハ葉物よし三月ハ弥生とていよく草木
生ずる故の略語なり既に夏来りて草繁る形を入るべし形ちハ
草の生方よし女子の祝ひ月なれバ和らかなる形をよしとす

○五月菖蒲のかしらにハ二重なれバ別に入べし廣口にハ水沢山
かる入方よし三躰三動時の宜しきに随ふべし

○七月蓮の會釈ハ二重ホの時も用ゆべし惣じて夏ハ廣物
よし真の形にして中央に生べし

○九月菊大中小ニ取合せ入べし尤大菊にかしらひ思慮あるべし
三躰二動ハ心ニ任すべし
右五節の花古来の定例として記し来れども強てこれニ限は
べきにはあらず有ニ任せて宜きニ随ふべし
挿とする事ハあれども京来木ニ木と會釈して好ましからば
一説ニ正月の花として男女の松に紅白の梅を入れ雑る規
殊ニ松ハ万木ニ勝れ梅ハ花の兄なり是を入まぜる事錦の衣に
綾の帯を結ぶがごとし花ハ侘る筒ニ好花を入れ美なる筒ニハ
後ましく花又ハ名もあれ花一瓶生ゆるぞ心も床しくて面白
過ぎるハ猶及バざるが如ししあん言て心得べし

同五本の會釈

○初ニ一の枝を挿れあまを流義によりて
人ともいひ用ともいひ行とも體ともいふ
次ニ二の枝をさし是人の副え
次ニ三の枝をさし是天の副え
斯て四のえだを立る是を天の枝ともいひ
又心ともいひ或ハ真ともいふ
爰に五の枝をそゆる是を地の
枝ともいひ草ともいふ

大菊五本の會釈

印のごとく次第にさすべし右も此順に定まるにハあらざれども大抵なれども思慮すべし但し花の都合によりて時の宜きにまかすべし

同三本のあしらひ

三本の時ハ上の五本の内にて四と五を除きてかくのごとし

○木二本の時草のあしらひハ五本之右是も石竹のごとき細く小きもの知るべきものハ時に順じ構ひ木一本あれバあしらひ二本あり草木躰用あはせて半の陽数に入べし

馬蘭七枚

馬蘭ハ五月より六月中まではハ若葉出揃ふて七月より十月末まで残の枯と称して十ヲに二三枚ハ枯葉をつけるも苦しからず

十一月十二月に枯葉を用ゆべからず正月より三月中まで九枚に一二枚あるハ宜しかるべしそれ凡そ二月より七月中までハ枯を用ひざれと心得べし

○巻葉枯葉の製法ハ第四編にくはしく記す

梅もどき 二本
葉蘭 二枚
小菊 三本
馬蘭を真のたすけにもちゆる図
是ハ菊二本をさしおき入
次に葉らん二枚次に梅もどきの真
添しく留の梅もどきを入るなり
真
用
留
二十三
馬蘭會釈挿方
○うしろハ心の
挿又ハ
うしろに
そゆるなり
二 天
一 人
地 三
また一のごとく
次第に
さすべし
心にそひて別に一種の
花挿るべし
二十四

○図のごとくあるの次第をさすべしむかしらいは心に添て心となりうることを嫌ふありたとへば心を取てのちるともかしらひのくかりて一種の体とくずさゞるやうにすべし是かしらいの心得第一之

○心を取のぞきてもかしらい又かくのごとし一種の花擬なり

右勝手
前枝垂流し
外二重留

右の図より工夫をもつて種々の曲花を挿べし

同上登流し

○會釈挿方の心得
すべて何の草木にても正面とうけすべるべしたとへ葉一まいにてもさするる事ときゝわく
○此二種ともにいづれも力なれども忌事あれば用ゆべからず
此ごとく花葉にて正面をうくすもきらふ也
○會釈する事ある圖
此ごとくひらくをよしとす
此ごとく付るときゝ此間ハずいぶん開くをよしとす
此葉一まいかゝるは有べし
正面のかざやうあるは必ずとつべし
椿五本の圖
又三本の時ハ副を用ひて花数ハ大概これと同じ
椿ハ葉を沢山につかへをうけるゝ真の一輪併しこれハつぼみにてつゝむなり又留の一輪ハひらきて平におくべし五本の時つけたる文をまず挿をよし
天
真
副
則手付もの人
用
地
留二本
是を水際の葉といふ
惣体のきまりなり
二十六

七本の図

天

副

真のえごにそふて脊ニ添ゆへ俗ニそへとも云

真の腰ニ添て胴の奥ニ有 俗ニ[illegible]とりと云

是ハ真をいだく助ゑ 俗ニ胴とも云

胴

脊

用のえごニそふてたすくるゆへ俗ニ扣ともいふ

扣

地

人

流しとも云

左勝手 真枝無かどし

前留

右勝手 前流し

左勝手 うしろ流し

右勝手 前留流し

○六月朔日ハ必らず廣口ニ水草をいれ石砂ホ白きを用ゆべしといへる説ハ
立花より出て水を表すと聞也

○八月十五日ハ廣口ニ時の草木を入稲を會釈豊年を祝ふとぞ

○男女ともに年賀の花ハ枝ニ苔のつきたるもの吉なりひハ残花を用也
是年久しく存ふる義也又帰花もよし若きに皈るの祝し也
枯枝又散やすき花落やすき葉の物ホ生べからず遠慮あるべし
常の祝ひニハ色ニかゝはらずいづれも賑やかニ生べし乗るものを
生べからず下るといふを忌く

○勅書の掛物ホの前の花ハ松之右も會釈も賎しからざる草
名の正しき物を中央ニ入る真の形たるべし

檜ハ
凡二本入べし
一本ハつまらず
三本面白
からずとかつり
いづれ大生の
ものし

檜小菊

福寿草

○軸前花の心得

○花器高く花小さからざれバ正中を少し軽くすべし是ちかく戒
覆ふ事を禁ずるなり凡て客ハ軸を先へ拝見して後花を一見
するが故なり此説通例なり然れども軸花ハ床の飾にして
正しく備へざれバよろしからず若花大形なれバ横物を掛べし
軸ハ軸にて明らかに見へ筒ハ筒にて慥かに見ゆるやうに置べし遠州
家にハ一行物の前の花ハ中縁以上に上べからず横物のまへ乃
花ハ軸より上へ生べからずとも言事とぞ

○瓶花を以て軸に代るといふ事なり是ハ軸一幅を以て二幅三幅つい
ともなしてほしく床大きく軸一幅の外なき時の心得なり則左右とも

掛板を用ひて生べし尤も軸の画に同じからざる花を用ゆる事切
論ず正中掛物左右花にして三幅對し軸二幅の中に花をうけ
板にて生て三幅對とし龍虎の二幅に竹の掛花又龍虎一ふくに
梅竹の左右の花なども然るべし乎左右の時ハ主位と客位と両方
へうけて生べし客位と客位と同じ挿方の重てなきハわろし

○詩歌連俳座席の花

○此雅莚においてハ古人の賞翫ありて哥に詠じ詩に作りし末巳花を
生べし古人の賞吟ありし花ハ挿べからず

○廣口の類ひの花器ハ花を前へ生る時ハ水を見る事少くして景
少し後へよすれバ水を見る事多くして涼しく景色よし

棕櫚の幹つきたるハ凡て大生ならでハ用ひず
尤二本を度とし又枯を用ひて三本の
事あるさりとも幹ハ○ど三本ハ
三を過てハあしく一本にても
可なり但し草の
形ハなし

小棕櫚ハ葉
ばかりを用ゆ三才三躰常に同じ尤真の形ハ宜

萩　桔梗　荻　芦　薄　大概入方同じ

萩ハ凡五本七本心ニ任るべし末留葉ぞのにて葉のつかひ方其外同じ葉のつかひ若葉を指入べし但し二月より五月中枯候へし此後若葉をすこしつかふべし土用過る時ハ枯葉

蘇鐵　小菊

蘇鐵ハ大生之二本以上五七本以下之草の形ほし葉ぞくりハ常に用ひべし

松
著莪

大松ハ凡砂生石どもあ大の五徳にすへて入べし

青竹とも葉つきし手桶
石竹

○花筏

○此花筏ハ石州侯の御物ずれろて薄板を組あはして掛篭を下よりあてて珎しき桜を生出して筏の上にそのりせ打水いたし合ゝて其中に吉野川の眺めふたし木の長さ二尺七寸ともめ次第に長短ありて数六本木ハ杉にて一寸六分四方之細き葛蔓にて二所あむ之頗る風流の具よろし又角筏にて長さ二尺八寸切口長短なく四方そろく

直に切べし此角筏ハむかしハ木にて作りしを
今ハ多く煤竹を用ゆ時の宜きに随ふべしと云

指船

長サ一尺七寸
幅七寸
底長サ一尺四寸
高サ
足とも五寸

○馬盥砂鉢廣口の類
其余種くの品も往古の
盆花石盆の餘風にして
其方を用ゆるにハ花留ハ
美石を用ゆること本意なれども花
留りがたきゆへ蟹衡の類を用ゆるも
是等の花器ハ四月より九月迄用ゆ

○堅炭つかひ方

○堅炭ハ一本遣ひ二三本よし
すぐに池田の皮付を用ゆ皮無ハ
禁べし切口ハ直なるがよし大小
長短の働ハ第一に會釈の花
沢山に入るよし又少も時宜ニ
よるべし凡石の置方ハ准之

○切隠の事ハ生花ハ立花と
異にして幹の切口ニ墨を塗て隠
白花ハ白きゆへ新の切口と見べなく

○木ニ木の會釈をとろハ柳ニ椿松ホ白頂花椿ホなり此余十二なりて

草花のあしらひく

○草ニ木の會釈をるこしハ鶏頭花ニ白頂花の類のこし乞廣口に

二生の時ハ鶏頭花に跋柏杉の會釈ホハ時の宜れニ随ふ又二重つ

時も是ニ同じ唯直ニいけらよ事ハ草ホ木と副るこしハおかし

○一瓶の内ニ同じ色同じ實ける物を挿べからく右も色ハ別ろうとも

實の指合ハ堅く禁べし

生花早満奈飛六ノ篇 畢

攝港 鶏鳴舎暁鐘成編輯

生花早學 自初篇至十篇 都合十冊 成刻

嘉永四年辛亥六月發兌

大阪心齋橋筋南久寳寺町

書房 伊丹屋善兵衛梓